埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書　第30集

前中西遺跡 XII

2018
埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書　第30集

前中西遺跡Ⅻ

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら、近年においては、多くの開発行為に伴い、我々の郷土の景観は日々変化しております。このような現状の中で、失われつつある文化財を保護し、それらを次世代に伝えていくことは我々の大きな課題であり、責務であるはずです。

さて、今回報告する前中西遺跡は、熊谷市上之地内に所在する原始から近世まで続く、複合遺跡であります。また、過去における発掘調査等により、この地内一帯には原始から古代にかけての集落が分布していることが確認されております。

この度、この遺跡の一部で集合住宅の建築工事の計画が持ち上がりました。熊谷市教育委員会では、遺跡の保護と保存についてその関係者との間で協議を重ねた結果、熊谷市教育委員会で記録保存のための措置を講ずることとなりました。

本書は、平成２８年１０月３日から１０月２５日にかけて実施された記録保存のための発掘調査の成果をまとめたものでございます。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を御理解、御協力を賜りました遠藤里美氏、並びに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成３０年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之字衣川２５６５番８地内に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号 59－092）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成２８年９月２日付教生文第 4-697 号である。

3　本調査は、集合住宅造成に伴う事前の記録保存のための発掘調査であり、その調査は熊谷市遺跡調査会を設立し、調査会が実施した。また整理作業については熊谷市教育委員会が作業を行った。

4　本事業の組織は、Ⅰ章のとおりである。

5　発掘調査期間は、平成２８年１０月３日から平成２８年１０月２５日までである。
また整理・報告書作成期間は、平成２９年４月３日から平成３０年３月２３日までである。

6　発掘調査は腰塚　博隆がおこなった。
本書の執筆・編集は熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力のもとに腰塚がおこなった。

7　写真撮影は、発掘調査、遺物ともに腰塚がおこなった。

8　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

9　本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。
（敬称略　五十音順）
埼玉県教育局生涯学習文化財課
熊谷市土地区画整理中央事務所

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

　ＳＤ…溝跡、ＳＫ…土坑、Ｐ…ピット

2　遺構図面中の表記記号は、次のとおりである。

　S…川原石（※土層表記中、指摘のないものは遺物を表す）

3　遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

　遺構全測図…１/50、各遺構…原則１/60、ただし一部に限り縮尺が異なる。

4　遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則として同一図版、同一遺構の標高は統一し、Ａポイントに表記した。なお、例外的に標高差が大きい場合は、統一せずその都度表記してある。

5　遺物実測図の縮尺は、１/ ４である。ただし、一部においてはその限りではない。

6　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。

　表現方法は、原則として須恵器のうち還元焔焼成の断面は黒塗り、須恵系土師質土器（酸化焔焼成）は表記を土師質土器とし、断面は白抜きで、灰釉陶器以外の土師器等の土器、その他の遺物の断面は白抜きで表した。

　それ以外の土器器面等の表現である釉薬、黒色処理、赤彩、炭化（煤・タール付着）等についても、適宜トーンで表した。

　底部調整については、 回転糸切りは ◌ で表した。

7　遺物である礫のうち、敲打痕があるものは、「◁――▷」がその範囲を、擦り痕があるものは「◀――▶」でその範囲を示した。

8　挿図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致している。

9　土層断面のうち一部は、平面図中の遺構を省略している場合がある。

10　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

　法量の単位は、cmである。また、推定値・現存値は括弧付けで示した。

　胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

　Ａ…白色粒子、Ｂ…黒色粒子、Ｃ…赤色粒子、Ｄ…褐色粒子、Ｅ…赤褐色粒子、Ｆ…白色針状物質、Ｇ…長石、Ｈ…石英、Ｉ…白雲母、Ｊ…黒雲母、Ｋ…角閃石、Ｌ…片岩、Ｍ…砂状、Ｎ…礫、Ｏ…金雲母

　色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010 年版）に照らし最も近似した色相を示した。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……9
　1　前中西遺跡について……9
　2　調査の方法……9
　3　検出された遺構と遺物……9
Ⅳ　遺構と遺物……10
　1　溝跡……10
　2　土坑……14
　3　ピット……18
　4　遺構外出土遺物……19
Ⅴ　調査のまとめ……19

挿　図　目　次

第1図　埼玉県の地形図……2
第2図　周辺遺跡分布図……5
第3図　調査地点位置図……7
第4図　調査箇所全測図（前中西遺跡）……8
第5図　溝跡（第1～4号溝跡）……11
第6図　溝跡出土遺物……12
第7図　土坑（第1～4号土坑）……15
第8図　土坑出土遺物……17
第9図　ピット……18
第10図　遺構外出土遺物……19

挿　表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表……6
第2表　溝跡出土遺物観察表……13
第3表　土坑出土遺物観察表（1）……16
第4表　土坑出土遺物観察表（2）……17
第5表　遺構外出土遺物観察表……19

図　版　目　次

図版1　調査区全景（南東から）、
　第1号土坑（中央部柱痕）（南から）
図版2　第1号溝跡（西から）、第2号溝跡（南から）
　第3号溝跡（東から）、第4号溝跡（北から）
図版3　第2号土坑　遺物検出状況及び柱痕跡（南から）
　第1号溝跡　遺物出土状況（東から）
　第6図1－2、第6図1－3、第6図1－4、第6図1－5、第6図1－8
　第8図1－3、第8図1－4、第8図4－1
図版4　第6図2－1～8、第6図4－1．2
　第8図1－1．2．5～9
　第8図3－1～4、発掘作業風景

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成２８年８月１日付けで、遠藤里美氏から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は面積170㎡に２棟の集合住宅を造成するものであった。

熊谷市教育委員会は届出を受けて、同年８月１２日に試掘調査を実施した。その結果、２棟のうち１棟の現地表面下140㎝の深度から弥生時代及び古墳時代後期から平安時代にかけての溝跡、土器片などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を遠藤氏に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更をしない方針となったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

そのため、熊谷市教育委員会では熊谷市遺跡調査会（以下、調査会）を設立し、発掘調査をその調査会が行うこととなった。

発掘調査は、調査会から、平成２８年９月２６日付熊発第２号で、文化財保護法第92条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成２８年１０月３日から開始された。

発掘調査終了後、平成２９年４月３日から遺物整理および報告書刊行作業を開始した。

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

発掘調査は、平成２８年１０月３日から平成２８年１０月２５日にかけて行われた。調査面積は、33.0625㎡であった。

まず、平成２８年１０月３日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。表土を剥ぎ終わったのち、翌日から遺構精査作業を行い、順次各遺構の掘り下げ作業を開始した。

一時雨の影響もあったが、予定した期間内で無事調査を終え、最終的に平成２８年１０月２５日、調査のすべてを終了した。

（2）整理・報告書作成作業

整理作業は、平成２９年４月３日から始めた。まずは、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後１１月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。１２月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、２月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、平成３０年３月２６日に本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市遺跡調査会

(1) 発掘調査

平成２８年度

会　　長	野原　晃
副　会　長	米澤　ひろみ
事務局長	山崎　実
事務局次長	森田　安彦
統括調査員	吉野　健
調　査　員	松田　哲
調　査　員	小島　洋一
調　査　員	藏持　俊輔
調　査　員	腰塚　博隆
調　査　員	山下　祐樹
嘱 託 職 員	山崎　和子

主体者　熊谷市教育委員会

(2) 整理・報告書作成

平成２９年度

教　育　長	野原　晃
教育次長	正田　知久
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課担当副参事	吉野　健
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井　端
主　　査	松田　哲
主　　査	星　祥子
主　　査	小島　洋一
主　　査	藏持　俊輔
主　　任	山下　祐樹
主　　任	腰塚　博隆
主　　事	武部　喜充
主　　事	島村　範久
主　　事	大野　美知子
嘱 託 職 員	山崎　和子

第１図　埼玉県の地形図（前中西遺跡　位置図）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

前中西遺跡は、熊谷市に所在し、JR高崎線籠原駅の南約２㎞、荒川から北へ約2.2㎞、利根川から南へ約10.0㎞に位置する。

本遺跡の所在する上之地区は、熊谷市の中央東部にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地上にある。櫛挽台地は寄居町末野付近を扇頂に、荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地のうち、荒川左岸側が浸食されてできたものである。そして、妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている洪積扇状地の新荒川扇状地（市西部）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その荒川左岸の新荒川扇状地の、標高約24ｍ前後に立地し、周囲より微高地であり、その周囲には水田が広がっており、近年では住宅地としての開発が目立つ場所である。遺跡を覆っていた土は、関東造盆地運動による地盤の沈下、及び微高地ではあるが、荒川の度重なる河川氾濫の影響がわずかに認められ、およそ1.1～1.4ｍの厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に櫛挽台地及び妻沼低地における歴史環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。まず、縄文時代であるが、熊谷市東部では極めて少ない。早期段階では熊谷市に隣接する深谷市東方城跡において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず、低地にも出現し始め、中期も特に後半段階の加曾利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地への進出が顕著になり、西城切通遺跡（地図未掲載）、場違ヶ谷戸遺跡（地図未掲載）など、櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が確認できるようになる。晩期では遺跡数が減少し、諏訪木遺跡が後期に続いて集落が確認できた唯一の事例である。調査において、遺構に伴って、大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。

弥生時代に入ると、初期段階である前期末から中期前半において藤之宮遺跡で土器片が検出されている。遺構として確認できた遺跡は櫛引台地直下の低地に集中しているが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡では前期末から中期前半の再葬墓が13基確認され、このほかにも、飯塚遺跡、飯塚南遺跡や深谷市の上敷免遺跡などでも再葬墓が確認されている。中期中頃になるとこれまでの状況は一変して、集落跡の展開が増す。東日本でも最古の段階の環濠集落と考えられる池上遺跡や、その墓域とされる方形周溝墓が検出された行田市の小敷田遺跡などがあり、集落としての展開が本格的に始まる。中期後半は前中西遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡で集落が営まれており、前中西、諏訪木、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。北島遺跡では、大規模な集落展開と墓域の形成のほかに、特筆すべきこととして、水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。このことは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、注目すべき遺跡として挙げられる。後期になると初頭については藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が確認された事例は前中西遺跡、北島遺跡以外に周辺での確認事例はない。

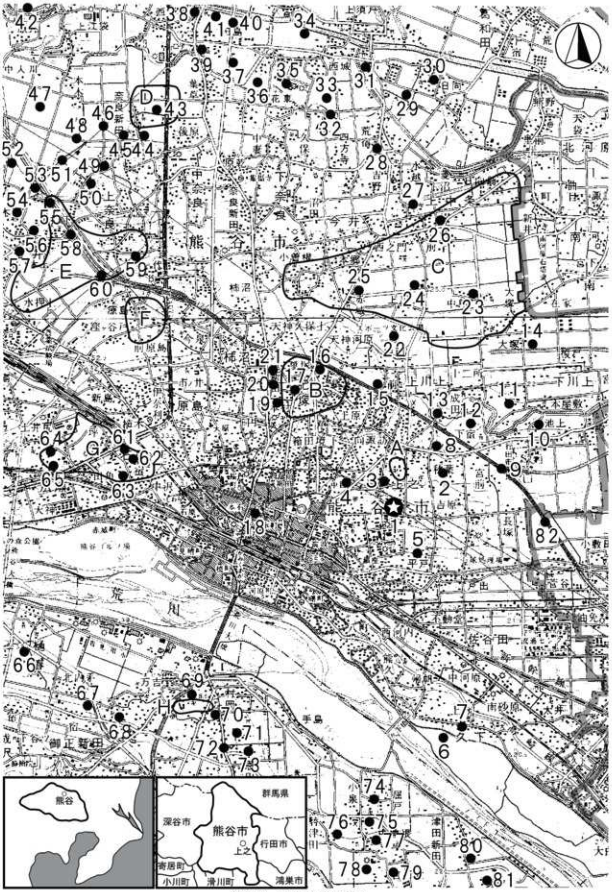
古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。横間栗遺跡・別府条里遺跡・一本木遺跡・中耕地遺跡・北島遺跡・弥藤吾新田遺跡等がある。横間栗遺跡では住居跡が３軒、北島遺跡では21軒検出されており、さらに弥藤吾新田遺跡

等は比較的大規模な集落と推定されている。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・常光院東遺跡（後者２遺跡は地図未掲載）等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甑を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出されている。また、集落内の祭祀は東川端遺跡に確認されていて、遺物が集中分布している谷にむかう斜面部で剣形の滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を向けると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防に横塚山古墳が存在する。そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりではなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。柳挽台地及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が150軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上に上る。また現在では同遺跡の一部となっている上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居が50軒以上検出された。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡等でも後期の集落が検出されている。一方、妻沼低地の自然堤防上では、一本木前遺跡・飯塚南遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡等が存在する。一本木前遺跡では後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が450軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、折り重なるように土師器杯等が出土し、それとともに臼玉も出土している。

一方、古墳を見てみると、群を形成して築造されているのがわかる。柳挽台地上の別府古墳群・在家古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、新荒川扇状地の玉井古墳群・広瀬古墳群・石原古墳群等が分布する。これらは概ね６世紀から７世紀ないし８世紀初頭にかけて形成された古墳群である。別府古墳群は、農夫の埴輪を出土している。籠原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、７世紀後半～８世紀初頭の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相において見流すことのできない発見である。三ヶ尻古墳群は、前方後円墳の二子山古墳を盟主墳とする100基以上の古墳で形成されている大古墳群であるが、現在でも61基の所在が確認されている（消滅・半壊を含める）。また、広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残す国指定史跡として知られている。

古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするもの奈良・平安時代へと継続されていく。奈良時代には、この地域も律令体制に組み込まれていき、別府条里遺跡等が見られる。このころの中心的遺跡は柳挽台地上に見られ、この地域には幡羅郡が設置され、台地上に「原郷」の地名が残り、正倉館、厨家、曹司等が発見された幡羅郡家跡の幡羅官衙遺跡、８世紀初頭創建の西別府廃寺、湧泉祭祀跡の西別府祭祀遺跡が存在する。西別府廃寺はこれまでの発掘調査によって寺域を区画する大溝、伽藍配置は不明であるが基壇建物跡、瓦溜まり状遺構等とともに軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が大量に出土し、瓦は８世紀初頭から９世紀後半のものまで確認されており、県内でも滑川町寺谷廃寺に次いで最も古い建立の寺院の一つとして認識されている。また、その北西約200ｍの湯殿神社裏のかつて湧水があった箇所には西別府祭祀遺跡が所在し、古墳時代後期から平安時代までの土師器・須恵器と共に古墳時代後期の馬形・柳型・勾玉形・有孔円板形・有線円板形・剣形等の滑石製模造品が約297点発見されており、県内でも類例がほとんどない湧泉に対する祭祀の実態を考える上で貴重な遺跡であ



第２図　周辺遺跡分布図

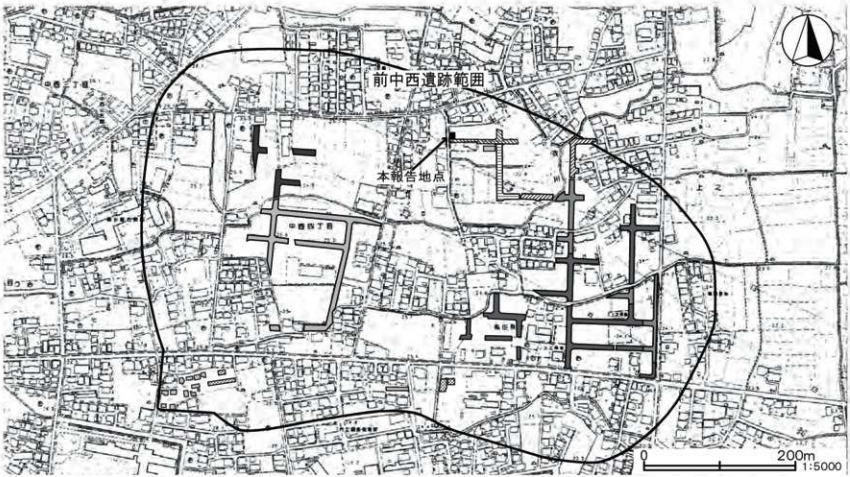
第１表　周辺遺跡一覧表

1	**前中西遺跡**	24	女塚遺跡	47	別府条里遺跡	70	北西原遺跡
2	諏訪木遺跡	25	赤城遺跡	48	一本木前遺跡	71	塚本遺跡
3	藤之宮遺跡	26	中条遺跡	49	土用ヶ谷戸遺跡	72	西浦遺跡
4	箱田氏館跡	27	中条氏館跡	50	奈良氏館跡	73	腰廻遺跡
5	平戸遺跡	28	光屋敷遺跡	51	天神下遺跡	74	北方遺跡
6	久下氏館跡	29	先載場遺跡	52	寺東遺跡	75	宮前遺跡
7	市田氏館跡	30	八幡間遺跡	53	稲荷東遺跡	76	西浦町遺跡
8	成田氏館跡	31	東城館跡	54	玉井陣屋跡	77	宮前町遺跡
9	池上遺跡	32	長安寺遺跡	55	新ヶ谷戸遺跡	78	宮町遺跡
10	古宮遺跡	33	西城館跡	56	水押下遺跡	79	中町遺跡
11	上河原遺跡	34	西城切通遺跡	57	稲荷木上遺跡	80	旭町遺跡
12	宮の裏遺跡	35	鵜森遺跡	58	下河原中遺跡	81	北町遺跡
13	成田遺跡	36	森谷遺跡	59	本代遺跡	82	小敷田遺跡
14	中条条里遺跡	37	鷲ヶ谷戸東遺跡	60	下河原上遺跡		
15	河上氏館跡	38	下三丁免遺跡	61	天神前遺跡	A	上之古墳群
16	八幡山遺跡	39	場違ヶ谷戸遺跡	62	兵部裏屋敷跡	B	肥塚古墳群
17	出口下遺跡	40	宮前遺跡	63	御蔵場跡	C	中条古墳群
18	熊谷氏館跡	41	実盛館	64	高根遺跡	D	奈良古墳群
19	肥塚館跡	42	道ヶ谷戸条里遺跡	65	不二ノ腰遺跡	E	玉井古墳群
20	出口上遺跡	43	横塚遺跡	66	宮前遺跡	F	原島古墳群
21	肥塚中島遺跡	44	東通遺跡	67	宿遺跡	G	石原古墳群
22	北島遺跡	45	西通遺跡	68	万吉西浦遺跡	H	村岡古墳群
23	中島遺跡	46	中耕地遺跡	69	村岡館跡		

る。西別府廃寺は、幡羅郡家との関係を考慮に入れれば、幡羅郡の郡司が関わった郡寺的な機能を有することが考えられ、郡家成立以前の周辺の古墳群を形成した有力氏族との関係も想定できる。

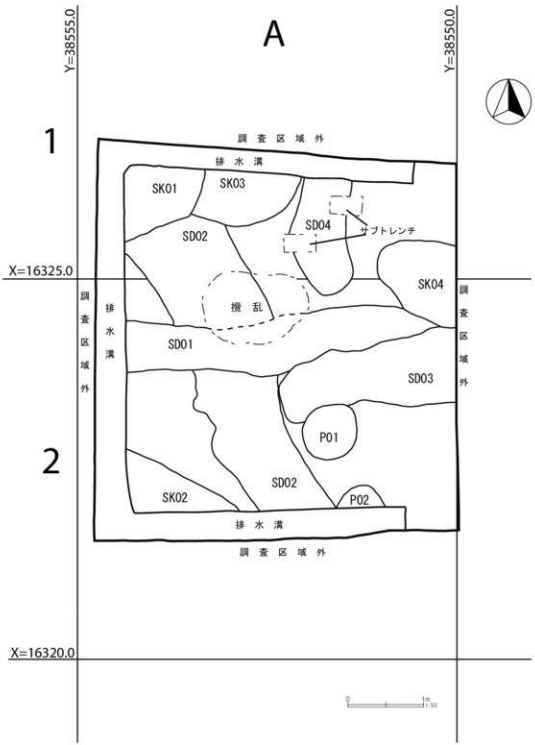
奈良・平安時代の集落遺跡としては、広瀬地区には本遺跡のほか在家遺跡・籠原裏遺跡・拾六間後遺跡・飯塚南遺跡・新ヶ谷戸遺跡・横塚遺跡・北島遺跡等がある。特に北島遺跡は７世紀から 12 世紀の大規模な集落で、多数の住居跡とともに大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等など、興味深い発見がされている。一本木前遺跡の 11 世紀初頭の住居跡からは、瑞花鸞鳳八稜鏡が出土し、県内初の住居跡出土例として注目されている。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。別府城跡・別府氏館跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・兵部裏屋敷等であるが、いずれの館跡も実態は不明である。その中で残りの良いものの中に、本遺跡の北西に位置する別府城跡がある。別府氏の居館で方形の敷地に土塁の一部と空堀をよく残している。また、三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡は、発掘調査によって、渡辺崋山が記した『訪瑶録』に残る「黒沢屋敷」の記載と調査成果が合致した貴重な例である。その北側に所在する樋の上遺跡でも、15 ～ 16 世紀の土壙・集石遺構とともに比較的深くコーナーをもつ溝跡が検出されており、館跡の一部である可能性が考えられている。なお、中世以降の歴史の実態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。



平成10年度報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
平成13年度報告地点(熊谷市教委)
平成14年度報告地点(熊谷市教委)
平成20年度報告地点(熊谷市教委)
平成21年度報告地点(熊谷市教委)
平成22年度報告地点(熊谷市教委)
平成23年度報告地点(熊谷市教委)
平成24年度報告地点(熊谷市教委)
平成25・27年度報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)
平成27年度報告地点(熊谷市遺跡調査会)
平成28年度報告地点(本調査)

第3図　調査地点位置図



第４図　調査箇所全測図（前中西遺跡）

Ⅲ　遺跡の概要

1　前中西遺跡について

前中西遺跡は、これまで幾重にもわたる発掘調査の結果、弥生時代中期中葉から後期前葉までの大規模な集落が存在することが分かっている。弥生時代の遺構としてこれまで確認されているものとしては住居跡が 60 軒、溝跡 30 条、方形周溝墓 20 基、土器棺墓 13 基、木棺墓 1 基、土坑 16 基である。主に遺跡の北部に集落があり、南部に方形周溝墓などの墓域が広がる。

それ以外にも古墳時代から中近世まで続く複合遺跡であり、古くから人々の痕跡が連続して確認できる貴重な遺跡である。

2　調査の方法

発掘調査の方法は、１辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をＡ－１とし、南へ１・２・・・とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・・・と呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。測量は日本測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。重機による表土剥ぎを実施し、その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

3　検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、溝跡４条、土坑４基、ピット２基であった。

遺物については、弥生土器から平安時代における土師器などの遺物が検出された。なお、腐食が甚だしいため取り上げは行わなかったが直径 18 ㎝程度の木柱が第１号土坑から検出されている。

検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦 40 ㎝、横 60 ㎝、深さ 14 ㎝）に１箱であった。

Ⅳ　遺構と遺物

1　溝跡

本調査における溝跡の検出状況は合計４条が確認された。

以下、溝跡ごとに詳細を記載する。

第１号溝跡（第５図）

Ａ－２グリッドから検出した。第２、３号溝跡、第４号土坑と重複しており、第２号溝跡を切っており、第３号溝跡、第４号土坑に切られていた。残念ながら溝跡すべてが検出されたわけではなく、多くが調査区域外であることから正確な様相は不明である。

検出長がおよそ8.45ｍ、幅は1.3から1.5ｍを測り、遺構確認面からの深さは、平均して0.36ｍであり、ほぼ東から西へほぼ東西方向に流れている。

掘り方は一様ではなく、確認できるところが断定的であるため、正確な判断はできない。しかし、いくぶん「コ」の字状に掘り、真ん中の落ち込みを意識して掘り下げたように推察できる。

土層観察からみると大体３層程度の堆積が確認できる。堆積状況も溝の両側からの堆積が確認できることから自然堆積によるものだと判断できる。

出土遺物は土師器の坏や小型壺などが検出され、他の遺構とは時期に違いがある。第４号土坑との切り合い関係もあるため判断が難しいが、時期に関しては８世紀末から９世紀と考えられる。

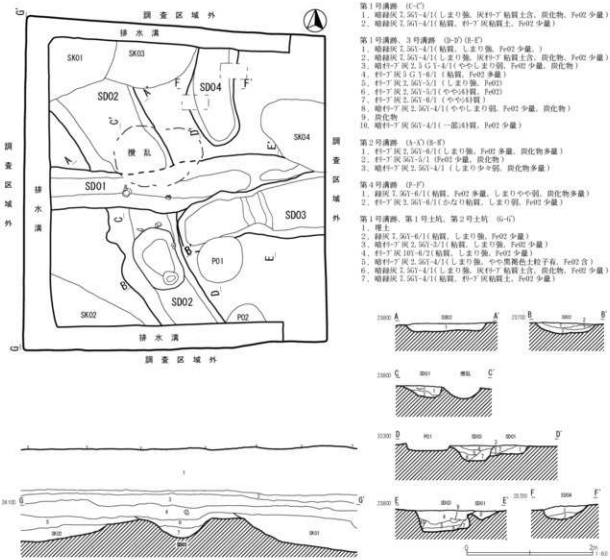
第２号溝跡（第５図）

Ａ－１，２グリッドから検出した。第１号溝跡、第１、３号土坑と重複しており、重複しているすべての遺構に切られていた。残念ながら溝跡すべてが検出されたわけではなく、多くが調査区域外であることから正確な様相は不明である。

検出長がおよそ９ｍ、幅は1.7から2.5ｍを測り、遺構確認面からの深さは平均して0.2から0.35ｍであり、ほぼやや南東方向に南北に流れている。平面プランからややいびつな流路であり、床面も一様ではなく、やや起伏が目立つ。掘り方も一律ではなく、土層観察をしたＡ－Ａ’とＢ－Ｂ’の掘り方を見るとＡ－Ａ’では上向きに「コ」の字状であり、とＢ－Ｂ’はつぶれた「Ｕ」字状である。

土層観察からみると部分的に１層の箇所もあるが、大体３層程度の堆積が確認できる。堆積状況も溝の両側からの堆積が確認できることから自然堆積によるものだと判断できる。

出土遺物は合計10点が実測可能なもので、それ以外は時期不明の土器細片であった。検出されたものすべてが弥生土器であった。器種は甕、壺などある。いずれも一個体分の検出ではなく、胴部、頸部、口縁部片などであり、大半が外面を櫛描文で描かれている。時期に関しては、大体弥生時代中期後半と推測される。



第５図　溝跡（第１～４号溝跡）

第３号溝跡（第５図）

Ａ－２グリッドから検出した。第１号溝跡、第４号土坑、第１号ピットと重複しており、第１号溝跡を切っていたが、第４号土坑、第１号ピットには切られていた。この溝跡においても残念ながら溝跡すべてが検出されたわけではなく、多くが調査区域外であることから正確な様相は不明である。

検出長がおよそ４.８ｍ、幅は１.９から２.１ｍを測り、遺構確認面からの深さは平均して０.５８から０.６５ｍであり周囲の溝跡に比べ深さがある。この溝跡は西端が検出されていることから、流路としての利用は考えにくいことが分かる。掘り方はかなり鋭角に掘られており、土層断面上ではＥ－Ｅ’でそれを確認することができる。

土層観察からみると数度にわたる堆積がみられる。レンズ堆積であることから、自然堆積によるものと判断できる。

出土遺物は残念ながら微細な土器片のみで、時期を判別できるものは確認できなかった。

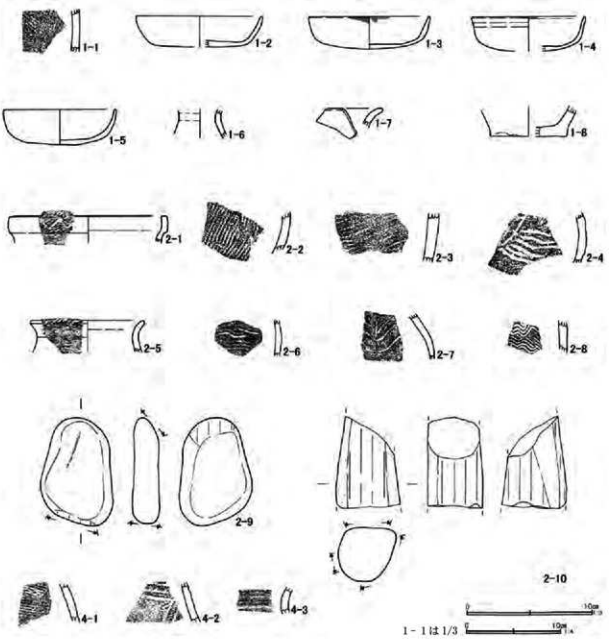
第４号溝跡（第５図）

Ａ－１．２グリッドから検出した。いずれの遺構とも重複関係はない。但し溝跡すべてが検出されたわけではなく、調査区域外であることから正確な様相は不明である。

検出長がおよそ3.5ｍ、幅は1.5から2.1ｍを測り、遺構確認面からの深さは0.4ｍである。この溝跡は南端が検出されていることから、流路としての利用は考えにくいことが分かる。掘り方はやや緩やかな落ち込みであり、溝には鋭角な傾斜は確認できない。

土層観察からみると２度にわたる堆積がみられる。レンズ堆積であることから、自然堆積によるものと判断できる。

出土遺物は土師器が１点のみで、それ以外は実測不可能なものを含めると十数点が弥生土器であった。実測可能なものは２点のみであったが、弥生時代中期末に属するものであることが推察できる。



第６図　溝跡出土遺物

第２表　溝跡出土遺物観察表

遺構名	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
SD01	1	弥生土器 壺 or 甕	-	-	-	ABI	にぶい黄褐 10YR-5/3	B	胴部破片	内面：一部朱塗り痕有 外面：わずかに櫛描による条痕有， 摩耗著しい	
SD01	2	土師器 坏	(13.5)	3.3	-	ABEJ	橙 7.5YR-6/6	B	40%	やや浅めで平底	
SD01	3	土師器 坏	(13.0)	3.4	-	ABI	橙 7.5YR-6/6	B	60%	内外面煤，油煙付着 底部ヘラケズリ痕 打明皿か？	
SD01	4	土師器 坏	(12.2)	3.7	-	ABDEI	褐 7.5YR-4/6	B	30%	煤付着，底部ヘラケズリ痕，口縁部 指調整による外反有 打明皿か？	
SD01	5	土師器 坏	12.0	4.2	-	ABDI	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	70%	平底の底部から口縁部まで直線的に 立ち上がる	
SD01	6	土師器 小型壺	-	(3.1)	-	ABE	橙 7.5YR-6/6	B	頸部～肩部 20%		
SD01	7	土師器 小型壺	-	(1.6)	-	ABD	明赤褐 5YR-5/6	B	口縁部破片		
SD01	8	土師器 壺	-	(3.2)	(8.0)	ABDI	灰黄褐 10YR-5/2	B	底部 20%	外面：横ナデ痕有	
SD02	1	弥生土器 壺	(17.0)	(2.9)	-	D	明褐灰 7.5YR-7/2	B	口縁部 10%	外面：口縁部櫛描による波状文１条有 内面：摩耗が著しいため不明	
SD02	2	弥生土器 壺？	-	-	-	BDGHIK	外面：赤灰 2.5YR-4/1 内面：暗紫灰 5P-4/1	B	胴部破片	外面：LR 単節縄文痕有	
SD02	3	弥生土器 壺？	-	-	-	DIN	外面：灰褐 7.5YR-4/2 内面：にぶい褐 7.5YR-5/4	B	胴部破片	外面：縄文痕有	
SD02	4	弥生土器 壺 or 甕？	-	-	-	DHIK	外面：にぶい黄橙 10YR-4/2 内面：暗紫灰 5P-4/1	B	胴部破片	外面：ヘラ描による複合鋸歯文の一 部か？	
SD02	5	弥生土器 壺	(12.2)	(3.4)	-	DIN	外面：黒褐 10YR-3/2 内面：にぶい橙 5YR-6/4	B	口縁部 20%	口縁部先端にわずかに刻み有	
SD02	6	弥生土器 壺	-	-	-	ADI	黒褐 2.5Y-3/1	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線（波状文？） その他沈線有（摩耗著しい）	
SD02	7	弥生土器 壺	-	-	-	ADGN	褐灰 5YR-4/2	B	胴部～胴部破片	外面：櫛描による波状文（３条）有	
SD02	8	弥生土器 壺	-	-	-	ADIK	外面：黒褐 2.5Y-3/1 内面：灰黄褐 10YR-4/2	B	胴部破片	外面：ヘラ描による波状文（４条１ 単位）２段有	
SD02	9	磨石	最大長 11.5 cm，最大幅 7.7 cm，最大厚 3.0 cm，重量 392g							表裏ともに一部が顕著に摩り痕有	砂岩
SD02	10	磨石	最大長（9.9）cm，最大幅 6.9 cm，最大厚 5.8 cm，重量 512g							全面のうち 70% 程度に摩り痕有	砂岩
SD04	1	弥生土器	-	-	-	AD	外面：黒 2.5Y-2/1 内面：灰黄褐 10YR-4/2	B	胴部破片	外面：横位羽状文有	
SD04	2	弥生土器	-	-	-	IN	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	胴部破片	外面：ヘラ描によるコの字重ね文， もしくは重三角文の一部か？	
SD04	3	土師器 壺	-	-	-	KN	浅黄 2.5Y-7/3	B	頸部破片		

2　土坑

本調査における土坑の検出状況は合計４基が確認された。

以下、土坑ごとに詳細を記載する。

第１号土坑（第７図）

Ａ－１グリッドから検出した。第２号溝跡と第３号土坑と重複している。どちらの遺構も第１号土坑が切り込んでいる。土坑の半分以上は調査区域外であるため詳細は不明である。

正確な規模は不明であるが､形状が角隅をもつ方形遺構の可能性が考えられる。検出長軸がおよそ2.1ｍ、検出短軸は1.4ｍを測り、現地表面下から3.35ｍの深さであり、遺構確認面からは0.75ｍであることが確認された。

掘り方はおよそ25°から30°程度の傾斜で掘り込まれている。

床面は中央にピット状の掘り込みを備えており、その内には柱の建材として利用した可能性のある柱の一部が確認できた。柱は残存が30ｃｍ程度、直径20㎝程度であり、調査時には腐食しているが、原形を留めており、柱穴底部に接していた面は水平に切断されていた。残念ながら検出された箇所がわずかであることから土坑と判断しているが、住居跡の可能性も考えられる。

土層断面は壁面から確認し、２層（第13層、14層）の堆積土が確認できる。

出土遺物は検出されたものすべてが弥生土器であった。器種は甕、壺、高坏などある。いずれも一個体分の検出ではなく、胴部、頸部、口縁部片などであり、大半が外面を櫛描工具で簾状文や波状文を描いている。時期に関しては、大体弥生時代中期後半と推測される。

第２号土坑（第７図）

Ａ－２グリッドから検出した。どの遺構とも重複関係はないが、土坑の大半は調査区域外であるため詳細は不明である。

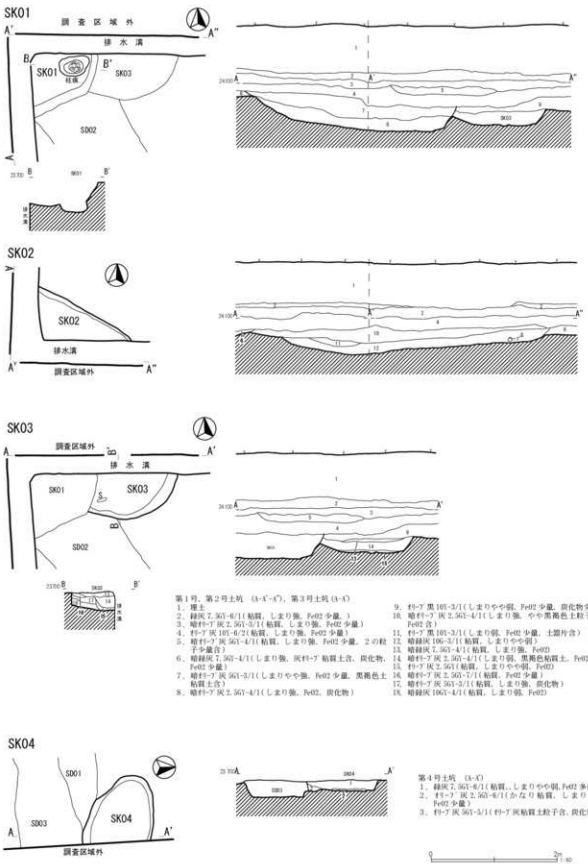
正確な規模は不明であるが、検出部の立ち上がりの端が直線であることから形状が方形遺構の可能性が考えられる。検出長軸がおよそ2.8ｍ、検出短軸は1.7ｍを測り、現地表面下から2.9ｍの深さであり、遺構確認面からは0.45ｍであることが確認された。

掘り方は比較的緩やかな傾斜で掘り込まれている。

床面は比較的平らな状態となっているが、部分的な検出のため詳細は不明である。

土層断面は壁面から確認し、３層（第10～12層）の堆積土が確認できる。第６層の暗緑灰土を切って掘り込んでいるのは第１号土坑も同様であることから、第１号土坑と同時期のものと推察できる。

出土遺物は残念ながら微細な土器片のみで、実測可能なものはなく、時期を判別できるものは確認できなかった。



第１号，第２号土坑（A-A'-A''），第３号土坑（A-A'）

1．埋土
2．緑灰7.5G5-6/1（粘質，しまり強，Fe02少量，）
3．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-3/1（粘質，しまり強，Fe02少量）
4．ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y-6/2（粘質，しまり強，Fe02少量）
5．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY-4/1（粘質，しまり強，Fe02少量，２の粒子少量含）
6．暗緑灰7.5G3-4/1（しまりやや強，灰ｵﾘｰﾌﾞ粘質土含，炭化物，Fe02少量）
7．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY-3/1（しまりやや強，Fe02少量，黒褐色土粘質土含）
8．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-4/1（しまり強，Fe02，炭化物）
9．ｵﾘｰﾌﾞ黒10Y-3/1（しまりやや弱，Fe02少量，炭化物少量）
10．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-4/1（しまり強，やや黒褐色土粒子有，Fe02含）
11．ｵﾘｰﾌﾞ黒10Y-3/1（しまり弱，Fe02少量，土器片含）
12．暗緑灰10G-3/1（粘質，しまりやや弱）
13．暗緑灰2.5G3-4/1（粘質，しまり強，Fe02）
14．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-4/1（しまり弱，黒褐色粘質土，Fe02）
15．ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY(粘質，しまりやや弱，Fe02)
16．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-5/1（粘質，Fe02少量）
17．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY-3/1（粘質，しまり強，炭化物）
18．暗緑灰10GY-4/1（粘質，しまり弱，Fe02）

第４号土坑（A-A'）

1．緑灰7.5GY-6/1（粘質，しまりやや弱，Fe02多量）
2．ｵﾘｰﾌﾞ灰2.5GY-6/1（かなり粘質，しまり弱，Fe02少量）
3．ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY-5/1（ｵﾘｰﾌﾞ灰粘質土粒子含，炭化物）

第７図　土坑（第１～４号土坑）

第３号土坑（第７図）

Ａ－１グリッドから検出した。第２号溝跡、第１号土坑と重複関係にあり、第１号土坑に切られ、第２号溝跡を切っていた。但し大半は調査区域外であるため詳細は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出長軸がおよそ 2.5 m、検出短軸は 1.5 mを測り、現地表面下から 3.15 mの深さであり、遺構確認面からは 0.45 mであることが確認された。

掘り方は、東端で緩やかであるのに対し、南端はほぼ垂直に掘り込まれている。このことから、掘り方に違いを設けた計画的な遺構の可能性が考えられる。

床面は比較的平らな状態となっているが、部分的な検出のため詳細は不明である。

土層断面から確認でき、合計６層（第 13 ～ 18 層）の堆積土が確認できる。南端は 16 層から 18 層で一度埋設され、その後残りの部分を 13 層～ 15 層で埋まったことが分かる。

出土遺物は検出されたものは土師器１点を除き、すべてが弥生土器であった。よって土師器は流れ込みと推察される。検出された器種はすべて甕であり、いずれも一個体分の検出ではなく、胴部、頸部、口縁部片などであり、大半が外面を櫛描文で描かれている。なお、一部で外面に赤彩が確認できる個体もあった。時期に関しては、大体弥生時代中期後から後期と推測される。

第４号土坑（第７図）

Ａ－１．２グリッドから検出した。第１、３号溝跡と重複関係にあり、その２条の溝跡を切っていた。但し大半は調査区域外であるため詳細は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出長軸がおよそ 2.3 m、検出短軸は 2.2 mを測り、遺構確認面からは 0.35 mであることが確認された。

掘り方は、両端とも同様の傾斜で掘り込まれ、やや急な傾斜である。

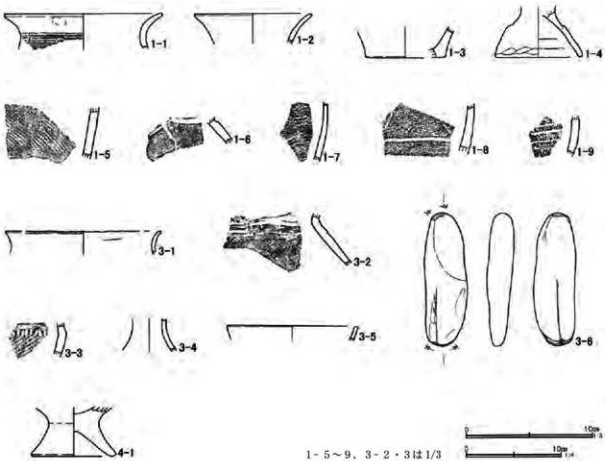
床面は比較的平らな状態となっているが、部分的な検出のため詳細は不明である。

土層断面から確認でき、合計３層（第１～３層）の堆積土が確認できる。いずれも自然堆積で埋まったものだと推察される。

出土遺物は検出されたものは土師器の台付甕１点のみであり、正確な時期判断は不明であるが古墳時代前期と推察される。

第３表　土坑出土遺物観察表（１）

遺構名	Ｎｏ	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SK01	1	弥生土器 甕	(16.8)	(3.8)	－	AEIKN	黒褐 2.5Y-3/1	B	口縁部～頸部 20%	外面：口縁部指頭圧痕有 頸部櫛描による羽状文（４条１単位）有	
SK01	2	弥生土器 壺	(12.4)	(3.2)	－	ABEN	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部 10%		
SK01	3	弥生土器 壺	－	(3.3)	(8.5)	ABEGIMN	灰黄褐 10YR-5/2	B	底部 20%	内面：ヨコナデ痕わずかに有	
SK01	4	弥生土器 高坏	－	(5.4)	(9.3)	ABIN	淡黄 2.5Y-8/3	B	脚部 50%	付け足し痕有 内面：ヘラナデ調整痕有	
SK01	5	弥生土器 壺	－	－	－	AIN	黒褐 10YR-3/2	B	胴部破片	外面：RL 単節縄文痕有	
SK01	6	弥生土器 甕 or 壺	－	－	－	AEIN	黒褐 2.5Y-3/1	B	胴部破片	外面：上部ヘラ状による沈線有	
SK01	7	弥生土器 甕	－	－	－	AIKN	黒褐 10YR-3/1	B	胴部破片	外面：櫛描による波状文（３条１単位）２段有	



第８図　土坑出土遺物

第４表　土坑出土遺物観察表（２）

遺構名	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SK01	8	弥生土器 甕	-	-	-	ABDIKN	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線有	
SK01	9	弥生土器 甕？	-	-	-	AEN	灰黄褐 10YR-5/2	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線文（４条）	
SK03	1	弥生土器 甕	(16.6)	(2.5)	-	ACJKN	黒褐 10YR-3/2	B	口縁部 10%	口縁部先端縄文痕？ 摩耗著しい	
SK03	2	弥生土器 甕	-	-	-	ABIKN	黒褐 2.5Y-3/1	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線２条、後にヘラケズリ調整か？	
SK03	3	弥生土器 甕	-	-	-	AIKN	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部破片	外面：赤彩有 爪形状を呈する刺突列文とLR単節の縄文痕有	
SK03	4	弥生土器 甕	-	(3.5)	-	ABDN	外面：明褐 7.5YR-5/6 内面：浅黄橙 10YR-8/3	B	頸部 20%	外面：ヘラ描による平行沈線２条有	
SK03	5	土師器 坏	(13.8)	(1.5)	-	AB	浅黄橙 10YR-8/3 赤 10R-5/6	B	口縁部 10%	赤彩有	
SK03	6	たたき石	最大長 14.1 cm、最大幅 4.5 cm、最大厚 2.7 cm、重量 243g							上部及び下部に敲打痕有	砂岩
SK04	1	土師器 台付甕	-	(5.3)	(9.0)	ABDI	褐灰 10YR-4/1	B	台部 60%	外面：わずかにヘラケズリ調整痕 内面：ヘラ調整後指調整	

3　ピット

ピットは、総じて２基検出した。いずれのピットも単独での性格を持つものと考えられる。

以下、ピットごとに詳細を記載する。

第１号ピット（第９図）

Ａ－２グリッドから検出した。第３号溝跡と重複関係にあり、第３号溝跡を切っており、完形の状態で検出された。

平面プランについては、ほぼ円形を呈するものである。

規模は長軸、短軸で 1.7 から 1.9 ｍを測る、深さは遺構確認面から 0.2 ｍであり、掘り方はやや垂直に落ち込んでいる。

土層断面から自然堆積によるものであるが、その用途は不明である。

出土遺物は残念ながら検出されなかった。

第２号ピット（第９図）

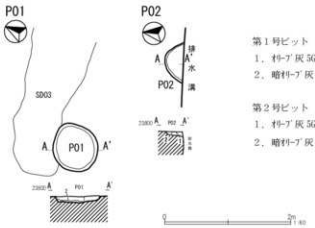
Ａ－２グリッドから検出した。いずれの遺構とも重複関係にはないが、排水溝に切られており、完形での検出ではない。

平面プランについては、円形を呈するものと推察される。

規模は長軸 1.25 ｍ、検出短軸で 0.6 ｍを測り、深さは遺構確認面から 0.1 ｍである。

検出面積がわずかであるため、詳細は不明である。

出土遺物は残念ながら検出されなかった。

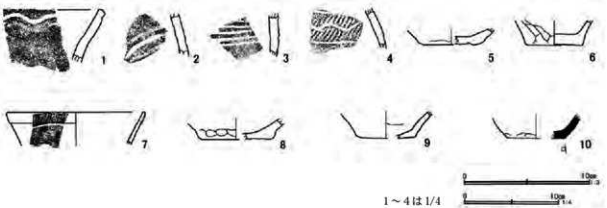


第９図　ピット

4　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物については、主に試掘調査と表土剥ぎの遺物である。何点か出土した。

以下、遺構外出土遺物として掲載する。



第 10 図　遺構外出土遺物

第５表　遺構外出土遺物観察表

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 鉢	-	-	-	ACN	灰黄褐 10YR-4/2	B	口縁部破片	外面：口縁部上部ヘラ描による波状文１条有	
2	弥生土器	-	-	-	ACK	にぶい黄褐 10YR-5/2	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線文３条有	
3	弥生土器	-	-	-	AHN	外面：にぶい橙 5YR-7/4 内面：灰褐 7.5YR-6/2	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線文５条	
4	弥生土器 壺	-	-	-	CKN	黄褐 2.5Y-5/4	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線２条、その間に縄痕文１条及びLR単節縄文痕有	
5	弥生土器 壺	-	(1.6)	(6.3)	ABI	にぶい黄 2.5Y-6/3	B	底部 20%	外面：赤彩有	
6	弥生土器 壺	-	(2.7)	6.2	ABJ	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	底部 100%	外面：ヘラケズリ調整痕有	
7	土師器 壺？	(14.7)	(3.6)	-	ADKN	浅黄 2.5Y-7/4	B	口縁部 10%	外面：粘土帯貼付による複合口縁、口縁にわずかに刻み？痕有	
8	土師器 壺	-	(2.2)	(7.6)	EIN	外面：淡黄 5Y-8/3 内面：にぶい黄橙 10YR-7/3	B	底部 30%	外面：指による調整痕有	
9	土師器 壺	-	(2.9)	(6.2)	ABDEM	外面：明赤褐 2.5YR-5/8 内面：にぶい黄褐 10YR-7/3	B	底部 20%	内面：輪積痕有、底部指頭圧痕有	
10	須恵器 坏	-	(2.6)	(6.4)	BDF	灰白 N-7/	B	底部 20%	内外面、回転ナデ調整痕 底部回転糸切り調整痕	南比企産

V　調査のまとめ

前中西遺跡の発掘調査は数十年に渡って続いており、縄文時代から江戸時代に渡っての人々の営みが確認されているが、比較的多く検出されるのは弥生時代の遺構、遺物である。今回の調査においても集合住宅建設箇所の調査であったが、第１号溝跡、第２号溝跡、第１号土坑は検出された遺物から弥生時代の時期に属する遺構が確認された。そのことからこれまでの調査同様、弥生時代の遺構を主体にする調査であった。

特に第１号土坑からは柱穴が検出され、柱穴内には柱の建材として利用した柱の一部が確認できたことは興味深いものであった。この上之地区は地下水が豊富なことから、当時は低湿地であったことが窺え、それを反映して、柱の原型を残した状態で検出されたのであろう。また、柱穴の底部からは弥生土

器も検出されたことから、地鎮目的で柱の下に埋設したものである可能性が窺える。

また、今回の調査では４条もの溝跡が検出されたが、時期の異なる可能性があるにしろ、この範囲の中で４条もの溝跡が確認されたことは、やはり水が豊富な低湿地であったことを裏付ける資料として改めて認識することができた調査でもあった。

以上のようにこの調査で特に、弥生時代中期～後期の遺構、遺物を確認できたことは貴重な情報であった。

引用・参考文献

『熊谷市史』前編　熊谷市　1963

吉野　健　『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅲ－熊谷市教育委員会　2013

金子正之　『石原古墳群第２号墳』熊谷市石原古墳群調査会　2008

蔵持俊輔　『上之古墳群・諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会　2013

写　真　図　版

図版 1

調査区全景（南東から）

第 1 号土坑（中央部柱痕）（南から）

図版 2

第 1 号溝跡（西から）

第 2 号溝跡（南から）

第 3 号溝跡（東から）

第 4 号溝跡（北から）

第 2 号土坑　遺物検出状況及び柱痕跡（南から）

第 1 号溝跡　遺物出土状況（東から）

第 6 図 1 － 2

第 6 図 1 － 3

第 6 図 1 － 4

第 6 図 1 － 5

第 6 図 1 － 8

第 8 図 1 － 3

第 8 図 1 － 4

第 8 図 4 － 1

図版 4

第６図２－１～８

第６図４－１．２

第８図１－１．２．５～９

第８図３－１～４

発掘作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきじゅうに
書名	前中西遺跡Ⅻ
副書名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	第30集
編集者名	腰塚　博隆
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2018（平成30）年3月26日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
前中西遺跡（まえなかにしいせき）	熊谷市上之字衣川（くまがやしかみのあざころもがわ）2565番8地内	11202	59-092	36°08′59″	139°24′06″	20160926～20161025	33.0625	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前中西遺跡	集落跡	弥生時代 中期・後期 平安時代	溝跡４条 土坑４基 ピット２基	弥生土器、土師器	弥生時代の中期から後期に至る溝跡が主体で確認された。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第30集
前中西遺跡XII
平成30年3月26日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／　大屋印刷株式会社